

資 料

テングカウモリに就て

岸 田 久 吉

農林省山林局鳥獸調査室¹⁾

テングカウモリ既知の産地 ここに單にテングカウモリとして報知するのは *Murina hilgendorfi* (PETERS, 1880) [sub: *Herpiocephalus*] のことである。此の種は、今日と雖も、日本内地の特産と考へて差支の無いものである。今、その既知の産地をペーテルス (1880), 渡江元吉 (1890), 青木文一郎 (1906), 岸田久吉 (1924, 1928, 1934), 黒田長禮 (1938, 1940) 諸氏の所記によつて、まとめてみると、東京府, 神奈川縣, 静岡縣, 岐阜縣, 京都府と云ふ2府3縣になる。

テングカウモリの新産地 昭和16年9月28日, 長野縣諏訪郡金澤村に於て, 珍しいことには, 成牡が1頭捕獲された。捕獲者は林學士日塔正俊氏である。採集時の様子を聞くに, 同氏は中央線の青柳驛前の小店で梨果を買つて居られたところ, その間から, 此のカウモリが落ちたので, 拾つて, 生きたままで農林省林業試験場までもたらされ, 筆者に同定をもとめられたのである。

此の個體 (♂ 成) の外部測定は, 次表の通りである。

頭 胴 合 長	54.0 mm	100%
尾	37.5 mm	69% (+)
後足 (爪共)	13.5 mm	
耳 (聴道—耳尖)	15.5 mm	
陰 莖	5.0 mm	
飛 膜 部		
前 腕	43.0 mm	
第Ⅰ指掌骨	10.0 mm	
〃 全長 (爪共)	11.5 mm	
第Ⅱ指掌骨	37.0 mm	
第Ⅲ指掌骨	37.5 mm	
〃 第Ⅰ指骨	17.0 mm	
〃 第Ⅱ指骨	15.0 mm	
〃 第Ⅲ指骨	7.5 mm	
第Ⅳ指掌骨	35.0 mm	
〃 第Ⅰ指骨	14.0 mm	
〃 第Ⅱ指骨	13.5 mm	
第Ⅴ指掌骨	38.0 mm	

1) 東京市目黒區下目黒 林業試験場構内

” 第Ⅰ指骨……………	13.0 mm
” 第Ⅱ指骨……………	10.0 mm

前表で注意すべきは、左右の別ある器官に就ては、すべて筆者の習慣によつて、右のものだけを計つてあることである。何にせよ、尾が頭胴の69%強即ち大體70%に相當することは、カウモリ研究上重要なことと思ふ。尙ほ此の際、筆者の圖解(1924, 1926, p. 197)に出した成♀は、腹の内臓を取り去り、綿をつめてアルコール漬にした、わるい標品で計つたのであり、數字が、少くとも頭胴對尾の關係に關する限りでは不良であるから、抹殺する。その後、幸ひに静岡縣産成牝を得て計つてあるのを此所に附記すると、頭胴……56.0 mm……100% 尾……37.0 mm……66% 後足(爪共)……13.5 mm 耳……15.0 mm……前腕……41.0 mmであつて、尾率は66%強の計算である。

即ち、テングカウモリとしての成體の尾率は、65~70%と書くことが出来るやうになつた。

テングカウモリの陰莖 カウモリ類の牡が、陰莖によつて容易に見分けられることは、カウモリ研究者間の常識である。ところが、本種のものを書いた文獻を筆者は知らない。故に、此所に之を少しく記載しておく。

筆者の見たものは、肉色で、粗毛性。こまかい皺は認められる。形は扁くなつた圓錐であつて、前下方にそがれて居り、其所に、縦向の尿道門が開いてゐる。全體を通じて、左右にのび、上下につまつて居り、又、前後にのび、後方即ち基脚に向ひ太くなつてゐる。(陰莖骨の所見は別の時にゆづる。)

テングカウモリ色彩上の特色 上部は淡黒色であるが、長大な灰白毛が散生してゐる(後肢にも)様は、決して同屬の他種と紛れしめない。胴腹は殆ど白く兩脇と後方へ黒ずんでゐる。吻は黒褐色。耳は淡黒く、尖に向つて濃くなつて居る。飛膜は淡い褐黒色である。

テングカウモリの外部寄生蟲 今回のものには、カウモリダニが少數と、多數のアマクチダニが寄生してゐる。テングカウモリの習性については殆んど何も書いたものが無いから、同好各位に對し、今後の御觀察を希はねばならない。〔昭和16年10月2日記す〕

新 著 紹 介

平岩馨邦・福田政次郎・井上幹造 しろねずみ =飼育・發生・解剖=

目次5頁、本文80頁、文獻2頁、索引13頁 昭和16年8月 丸善株式會社 4圓50錢

私がはじめて鼠を使つて仕事をやり出した頃、當時東大動物學教室の暖房たき兼小使(?)の爺さんに時々鼠の世話を手傳つて貰つたものであつたが、その爺さんは、平岩さんが教室に居られた時にも鼠の世話をやつたのださうで、“平岩さんは随分たくさん鼠を飼つて居られましたよ。〇〇〇〇匹位も居ましたよ。”と折にふれて私に語つた事があつた。私が鼠を受けついだ以來、一番多く持つてゐた時でも、平岩さんの數に比すればその何分の一かにすぎない。私には“鼠小屋に籠つて白鼠の世話に専念した”といふ此の本の序文にある平岩さんの言葉も素直に理解出来るのである。本書はかうして白鼠の“飼育と發育の觀察”に深い經驗を積まれ、且20年に餘る年月“白鼠への關心”と“消し難い熱情”を持ち續けて來られたといふ平岩さんが、高弟福田、井上兩氏の協力を得てなされたものであるから、それだけで充分信頼するに足る本といふ事が出来る。

はじめに鼠概説として、我々の住宅附近で目にふれる鼠の種類、それが何處に發祥し如何なる経路によ